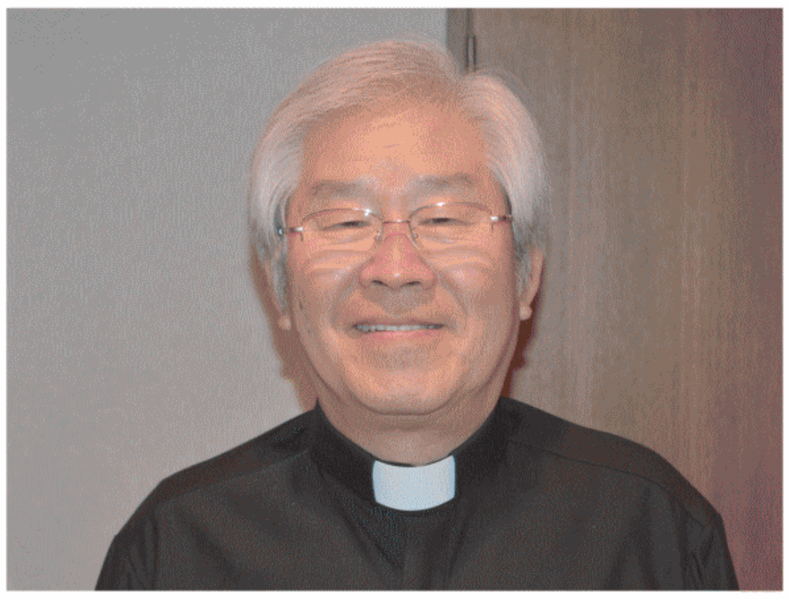
部会だより

キリスト教保育連盟
神奈川部会
2014年２月19日
第125号

キリスト教保育連盟　神奈川部会　２０１３年度主題

「あふれる愛」

聖句「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。
その中で最も大いなるものは、愛である。」
－コリントの信徒への手紙Ⅰ 13章13節－



テーマ〈秦野の地で５年目〉

白百合幼児園
園長　堀　光雄

秦野の地で、日本基督教団秦野教会の主任牧師職を兼ねて、付属白百合幼児園々長を始めて五年目になりました。牧師職はともかく幼児施設の責任者としては全く初めての務めであり、本当に戸惑いながらの歳月でした。

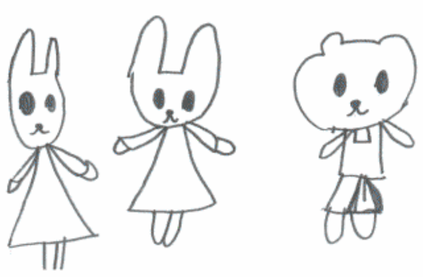
秦野の土地は北に丹沢の山々、南は低い渋沢の丘陵地帯で囲まれた盆地です。赴任当初この景観の中で生活する人々はなんと恵まれていることかと思いました。事実、古い卒園生の保護者で、幼児園をこよなく愛して下さる方々（ご高齢の方たちですが）から、数十年前に秦野の景観とその牧歌的な雰囲気に、ここで子どもを育てたいと引っ越して来られたと伺いました。秦野の地理的環境は歴史にも豊かなものを与えてきたようです。地名の「秦野」とは、秦の人々の野という意味もあるようで大陸からの渡来の人々が居住地として開いたようで市内に八世紀頃の古墳が存在しています。おそらく古代、中世の時は住む人にとり豊かな小天地だったのでしょう。近世以降の秦野は幕藩体制のもと旗本の知行地になります。幾つかの旗本家の墓地があり案内看板があります。いわば江戸（東京）を中心とする首都圏化？の一歩です。

そして戦後、日本の社会変化のもとで、この地も変化しました。工場誘致、それに続いて首都圏の周辺的なベットタウンとして住宅開発等を通して人口も増えていきます。秦野市の都市作りはこれによっているようです。居住者誘致の一環として、自治体による幼児施設の設置が行われて現在では全ての公立小学校に幼稚園、もしくは保育園が設置されています。白百合幼稚園は、そんな戦後の変遷の中、一九六〇年に始まっています。まだ、幼児施設が充分でなく、キリスト教幼児教育にあこがれがあった時代にこの地での幼児教育を担ったと言えるでしょう。創始期の雰囲気そのままの（建物は変わりましたが）教会幼稚園です。言うまでもなく経営は厳しい状況です。しかし、新米園長の五年で見えてきたのは、社会変化の中での子どもと保護者たちの具体的な葛藤です。一つ一つ、個々の生活において起きる葛藤です。それらは現代日本に生きる人々の葛藤です。ただ、人はそれぞれのありように於いてそれぞれ具体的なありようの葛藤を生きています。その葛藤の中にある人の生活に幼児教育を通して「神は、我らと共に居ます」という福音の神の恵みを分かち合うことがとても大切なことであると示されています。

聖霊により、その恵みのもとに過ごしてまいりましょう。皆様に神のお恵みを祈ります。

聖　句

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。
（マタイによる福音章1章23節）



《テーマ》
私達の考える
「子ども・子育て
支援新制度」

幼児教育は人生の土台作りです

霞ケ丘幼稚園
園長　喜田川　悦　子

幼稚園が設立されたのは一九五一年四月です。其の次の年から幼稚園と共に歩んで参りました。それまでは近江兄弟社学園で教師をしていました。校長が一柳満喜子先生（建築家のヴォーリスさんの奥様）で教育について色々と指導していただきました。

子どもには「見る目」がある。芸術作品を見せる。「聞く耳」がある。クラシックの名曲を聞かせる。「考える頭」がある。色々の事をよく考えさせるでした。此の事は幼児教育でも同じで当園では「ゴッホ」や「モネ」等の名画の額をかけています。

幼稚園協会の研修で「カナダ」に行った事があります。其の時当地に住んでおられた日本の方が、日本人は何か相談する時すぐに「皆様と同じで結構です」と意見を主張しませんが、馬鹿にされます。「私はこう考えます」と意見をはっきり言える様に幼児期から教育して下さいと言われました。

それ以来当園では「紙ちょうだい」と言いに来た時「何に使うの？」「何枚いるの？」「どれ位の大きさ？」「色は？」と聞いて答えを待ってから紙を与えています。

長い人生には「喜び」や「苦しみ」がありますが、それぞれに与えられた生涯を最善に全うするのには人生の土台が必要です。其の土台は幼稚園教育で築かれると思います。

小学生から送ってきた年賀状に「光りの子として歩みなさい」は六年生になった今でもはっきり覚えていますと書いてありました。

繰り返す事のない幼稚園の教育は、たおれない人生の土台を築く大切な教育です。お互いに支え合って一日一日を祈りつつ大切に過ごしたいと思っています。

こどもの園

認定こども園捜真幼稚園
施設長　岡　野　きよみ

子ども子育て新システムへの移行が目の前に迫っている今、それぞれの園で様々な事に取り組まれているのではないでしょうか。我が園もどのようにあるべきなのか、模索しつつ歩んでまいりました。１９９８年より預かり保育を手掛け、２００６年９月より０歳児からの預かり保育に着手しました。そして今年度より幼保連携型認定こども園となり、朝７時半から１８時半まで１歳～５歳の子どもたちの声が聞こえている園となりました。

これまでの道のりは、保育者や保護者にとっても大きな変革を伴い、様々な軋轢や思いが渦巻く中で、変化に弱い私たちは戸惑いや不安を乗り越えるために、祈ることしかできない時もありました。また認定こども園への申請に当たっても幾度となく八方塞がりの状態に陥りました。今日までの道のりは、いばらの生えた道ではありましたが、痛みばかりではなく発見や学びの時ともなりました。

新しい取り組みに関する保護者からの感謝の声や共働きの家庭も求めていた保育の質やキリスト教保育のニーズに答えられる園であることなど、現代社会の様々な子育ての現状を肌で感じられる様になりました。保育現場に変革が求められていることや、子どもを取り巻く地域社会の環境悪化を嘆いている今も、子どもたちはその様な社会の中で成長しています。

教育者の願いは、変わらないものなのではないでしょうか。

人は自分の蒔いたものを、また刈り取ることになるのです。自分の肉に蒔く者は、肉から滅びをかりとり、霊に蒔く者は、霊から永遠の命を刈り取ります。またたゆまず善を行いましょう。飽きずに励んでいればなります。

ガラテヤの信徒への手紙５章７～９節神さまが与えてくださる子どもたち

や保護者と保育者が、共に育つことのできるキリスト教保育を行う子どもの薗として、神さまが求めている良い物を与え続ける園であり続けたいと願っています。そのためには時には、今までの保育の常識が今の常識でないことを受け止める、寛容な心の目を持つことも必要なのだと思います。私たちの思い出はなく、神さまが求めておられる良き種を飽きずに蒔き続け、これからも園に携わるすべての者と共に、永遠の命の実を刈り取ることのできる子どもの薗として、祈りつつ歩み続けてゆきたいと思っております。

こどもがこどもであるために

桜ケ丘幼稚園

幼保一元化、幼保一体化、総合こども園等の話が出始めてから、かなりの年数が経ち、逆に平成二十七年度から、認定こども園への移行が始まる。

当園は、現時点では新制度内の「幼稚園」を選択する予定でいるが、平成二十六年度になるまで公定価格等の具体的な全容が見えない中で、認定こども園への移行を考えることに対し、少なからずの不安を感じているからである。

何より、今回の新制度が、戦後最大の幼児教育改革だということはわかるが、子ども主体の、「子どものために」という議論が尽くされたとは考えがたいことも、こども園での移行へ積極的になれない要因だと思う。

「こども・子育て支援制度」とは言うが、「子育て支援」を中心とした改革に思えてならない。子どもを主体に考える立場の者として、社会や保護者の側だけを向いた幼稚園であってはならないと思う。

もちろん、地域や社会の変化により、子育てが母親一人に負担がかかりがちであることは認識しており、保護者が行き詰まってしまう状況は避けねばならず、そのことへの援助は、これまで以上に惜しみなくやっていきたいと思っている。

新制度の下、変化せざるを得ない状況も覚悟はしているが、これまで、第一に子どもを主体に考え、保育を行なって来た歴史を大切にし、どのような状況に置かれても、「こどもがこどもであるために」守るべきものを守っていくだけである。神さまの導きを信じ、祈って歩みたいと思う。

私達が考えるこれからの子ども園・預かり保育

関東学院のびのびのば園
保育園施設長　小　高　千　恵

子ども・子育て支援新制度によって日本の乳幼児教育が大きな転換期を迎える。のば園は幼稚園児の減少と園舎老朽化に伴い子ども園として開園二年目。保留児（実質待機児）の多い保育園は六〇名定員に対し九〇名在園。保育内容や保育形態・教職員の人事や労務（労働条件やシフトは教職員に差は無）・地域との連携・幼稚園文化と保育園文化の差異なども含めると、まだまだ模索期にある。

のば園は、幼稚園だけでは出会うことの出来なかった子どもやご家庭と繋がることが出来、より地域と共にある園になれた。教諭・保育士・看護師・管理栄養士・調理員・事務員・用務員はそれぞれ専門分野は異なるが、子どもに仕える為にチームを組んでいる。部会の各園も保育理念に照らし合わせつつ、福音の種まきの場として、また、共に生きる実践の場として出来る事とすべき事を広げていかれることを願っている。

ＯＥＣＤ教育局長は「低年齢層への公的投資」の意義を報告書スターティングストロング３で、「幼児教育・保育は様々な恩恵をもたらすことが出来るが、質を考慮せずにサービス量を拡大しても良い結果にはつながらない。質の確保にコストはかかるが、投資するだけの価値がある」とし、５つの提言をしている。目標と規制の設定／カリキュラム基準の整備／スタッフの資格・訓練・労働条件の改善／家庭や地域との連携／改善のための調査研究の推進。

主にゆだね、主にすがる時にこそ聖霊の力が得られることを固く信じて、課題に取り組んでいきたい。

講演会に参加して

めぐみ幼稚園　園長　宮澤　恵樹

十一月六日、キリスト教保育連盟神奈川部会、第2回講演会を清水ヶ丘教会を会場として、大賀たえ子先生を講師としてお迎えし、行うことができた。「今、子どもたちに現れている発達の弱さ」―乳幼児期の保育に脳科学教育の視点を―というテーマでお話をして頂いた。子ども達は遊びにおいて屋外から屋内へと遊びが変化している。テレビ、ビデオ、ゲーム、スマホ等に夢中になり、言葉、発達に影響が出てくる。又、子どもの就床時間の問題、睡眠時間の問題と大切さを学んだ。これらの問題は、子ども達の脳の働きに大きな影響を及ぼしていることは顕著だ。何程基本的な規則正しい生活が大切なのか、再認識させられた。子ど達をお預かりしている私達は、しっかりと子どもに及ぼしている現代の背景と発達への影響を考えながら保育をしなくてはいけない。

〈役員会報告〉

書記　奈良昌人

役員会は九月十二日(木)、十一月二十一日(木)、十二月四日(水)クリスマス礼拝後に開催されました。主なことを報告いたします。

◆夏期講習会を終えて・・・八月二十日（火）関東学院大学にて三十六園、一養成校、一八八人が参加し開催されました。開会礼拝では片瀬教会牧師・片瀬のぞみ幼稚園園長西田直樹先生よりメッセージをいただき、続く講演では、信濃教育会教育研究所所長　佐伯　胖先生より「環境を活かした保育」のテーマでお話いただきました。昼食後はワールドカフェによる三十五グループに分かれての話し合いが行なわれ、自由な雰囲気で発言でき、とても好評でした。勤続十周年以上の二人の先生方への永年勤続表彰が行われました。

◆第二回講演会は十一月六日（水）清水ヶ丘教会において関東学院幼稚園・小学校カウンセラー、医学博士の大賀たえ子先生をお招きし、「今、子どもたちに現れている発達の弱さ―乳幼児期の保育に脳科学教育の視点を―」のテーマでお話しを伺いました。最近のゲームやスマートフォンによる、乳幼児期の脳の発達への影響等を具体的に示されました。

◆クリスマス礼拝は十二月四日(水)清水ヶ丘教会にて日本キリスト教団川崎境町教会牧師・福音幼稚園園長今野善郎先生よりクリスマスメッセージをいただき、恵みのうちにクリスマスの喜びを分かち合いました。

◆各園からの献金は横浜訓盲学院、国境なき医師団、連盟の被災地支援にお渡ししました。

◆園長・設置者・主任研修会

二〇一四年一月十二日(日)～十三日（月）にグランドホテル湘南・藤沢にて、玉川大学教育学部乳幼児発達学科教授　四季の森幼稚園園長若月芳浩先生より「これからの幼児教育・保育を考える。」についてお話を伺い、良き学びと交わりの一泊を過しました。

◆保育環境研修会と全体主任会

二〇一四年二月十九日（水）に関東学院六浦こども園にて行なわれます。保育環境研修会は午後三時より。全体主任会は午後五時より予定しています。

発行日　二〇一四年二月十九日
印刷所　樋口タイプ印刷
編集者　神奈川部会　広報担当
聖鳩幼稚園　林　光
のぞみ幼稚園　藤田希恵子
イラスト提供　宮の台幼稚園

編集後記

今年最初の部会便りのテーマは「子ども・子育て支援新制度」です。この大きな流れの中で悩みつつも新しく歩まれる園、建学当初の精神を大切にされる園、それぞれに神様の祝福がありますように お祈り致します。
原稿をお寄せ下さった各園の先生方に心より感謝を致します。